

穎原退藏著作集

第十二卷

潁原退藏著作集

第十二卷

額原退藏著作集 第十二卷

定価 一八〇〇円

昭和五十四年十月一日印刷  
昭和五十四年十月十日発行

著 者 額 原 退 藏

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 田 博

発 行 所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七  
電話(五六一)五九二一―九

振替東京二―三三四  
©一九七九 検印廃止

目次

芭蕉と門人

五

其角

二七

嵐雪

五〇

丈草

五五

去来・丈草・凡兆

九

去来

一〇

去来私考

一三

去来の芭蕉入門

菊の杖

可南女

農夫為有

落柿舎

一五

薄塚——去来と長崎

一七

凡 兆 支 考 許 六 杉 風 野 坡 越 人 北 枝 惟 然 路 通 園 女

去來の遺著——特に『去來抄』について

後記

一五 二〇三 二四 二四 三六 三五 二四 二五 二五 二七 二七 三〇

# 芭蕉と門人



## 芭蕉と門人

例へば我々が其角を語り嵐雪を語らうとする時、それが彼等自身の人物・俳風等に対する関心のみに基づく事は、もとより絶無ではなからう。けれども多くの場合語る人の興味は、彼等が芭蕉の門人であるといふ事にかゝつて居る。少くとも杉風や越人や荷兮等に至つては、彼等が蕉門の人でなかつたとしたら、今日の俳諧史家はそれ程彼等の為に語ることをしないであらう。要するにそれが蕉門の人々であるかぎり、伝記についても作品についても、その考察の中心はまづ芭蕉との關係に置かれるのが常である。その点で貞徳とその門下、宗因と談林の徒との間柄などに比して、蕉風といふ一俳団に於ける芭蕉の中心的地位は、極めて重く又高く見られる。だから蕉門の人々に関するあらゆる話題は、一時全く芭蕉から離れて居るやうに見えても、結局は芭蕉に帰つて来なければならぬ。して見れば其角・嵐雪・去来・丈草等々と、個々の門人についてそれ〴〵詳しく語られながらも、又芭蕉對門人たちの全体的な結びつきが種々の方面から見られねばならない。年代的な変遷、地域的な特色、門人間の葛藤等の事実から、芭蕉が同じく師としても芸道上の立場に於ける厳しい態度、更に又人間的情味の溢れた処置等、考ふべき問題はかなり多い。今それらの問題の幾分かに触れることによつて、芭蕉研究のある一面に資したいと思ふ。



芭蕉が最初に門人を得たのは、言ふまでもなく江戸の地であつた。これよりさき郷里で『貝おほひ』が撰ばれ、その中に句を合せた人々の中には、すでに門人と言つてよいものもあつたかも知れないが、その後の芭蕉との間の交渉は殆ど知られない。とにかく伊賀や京都が蕉門の一淵叢と見なされるのは、江戸よりも遙かに遅れて居たのである。江戸で芭蕉が初めて旅装を解いたのは、卜尺の許だとも又杉風の家だとも伝へられて居るが、いづれにせよ江戸蕉門の随一として、終始渝る事のない信頼を得たのは杉風であつた。その後其角・嵐雪等の如き優秀な門人を得て、かの『桃青門弟独吟二十歌仙』二巻が延宝八年四月に刊行された。この間に江戸俳壇に於ける芭蕉の宗匠としての地位は、十分世間に認められるやうになつて居たのである。二十歌仙の作者は杉風・卜尺・巖泉・一山・緑系子・僊松・卜宅・白豚・杉化・木鷄・嵐蘭・楊水之・嵐亭(嵐雪)・螺舎(其角)・巖翁・嵐窓・嵐竹・北鯤・岡松・吟桃等の人々である。この中には後年その消息を全く伝へないものも少くない。尤も例へば白豚の名が元禄八年六月朔日杉風から高山麋時宛てた手紙の中に見え、当時なほ俳諧に熱心であつた事が知られたり、北鯤・嵐竹等が『深川集』に至つて些か活躍のあとを示し、卜宅の如きは頗る長生して其・嵐の三十三回忌に句を手向けたりして居る類はあるが、まず真に江戸の蕉門たる名実を備へたのは、杉風・嵐蘭・嵐雪・其角の数人に過ぎない。しかも嵐蘭が師に先だつた外、この数人は芭蕉の終焉まで最も有力な門人として江戸に健在して居たのである。

江戸で宗匠として立つた芭蕉に対する門人たちの信頼はどうであつたか。それは『独吟二十歌仙』中

の嵐蘭の一巻の揚句、

### 桃青の園には一流ふかし

の一句にも、師弟の自信の程は十分窺はれるのである。もとよりこの頃芭蕉の俳風は、なほ談林の余臭を脱したとは言へない。けれども『独吟二十歌仙』と同じく延宝八年に公けにされた其角の『田舎之句合』、杉風の『常盤屋之句合』等にも、或は「桃翁栩栩斎にいまして、為に俳諧無尽経をとく。東坡が風情、杜子が洒落、山谷が気色より初めて、その体幽になどらか也」(田舎之句合、嵐雪の序)と言ひ、或は「詩は漢より魏に至るまで四百余年、詩人才子文体三たび変るといへり。倭歌の風流代々にあらたまり、俳諧年々に変じ月々に新なり」(常盤屋之句合、芭蕉の跋)と言ひ、師弟共に持する所が高く、しきりに新風に移らうと努めて居たのである。だから延宝初年に発足したばかりの桃青の一流は、数年ならずして江戸俳壇に独自の存在を認めさせる事が出来た。言はばこの間師弟の呼吸はびつたりと合つて、一に芭蕉の指導に任せて進んだと見られる。天和年間に入つて俳風一新の兆が萌した時、いち早くその風体を世に問うた言水の『東日記』にも、蕉門の徒は総帥桃青を初め其角・杉風が加はり、特に桃青・其角の作には談林的志向から全く脱するものが見られた。而してこれと前後して蕉風開発の第一声と称せられる『次韻』が成つた。その連衆に才丸が加はつて居る事は、これを純蕉門の撰集とするのに躊躇せしめるやうではあるが、一面から言へばそれは却つて桃青一流の新勢力を感じしめるものである。しかもその勢力が決して政治的な画策によるのではなく、芭蕉に対する一般の信望に基づいた事は注意されねばならぬ。

門人たちはかなり早くから芭蕉を呼ぶに翁の敬称を用ゐたらしい。『田舎之句合』に嵐雪は「桃翁栩栩斎にいまして」とも「是に翁の判を獲たり」とも言つて居る。当時芭蕉は三十七歳である。いかに

門人の敬称にしても過ぎて居るやうに思はれるが、それから僅か二年の後に出了た他門の撰集『武藏曲』<sup>むさどま</sup>にさへ、「芭蕉翁桃青」と記されて居るのである。これも門人たちが「芭蕉の翁」と称して居るのを、そのまゝ肩書の如く記したのであるかも知れない。それにしてもやはりその敬称が芭蕉にふさはしく思はれたればこそ、他門の撰者もこれを桃青の肩書に署したのであらう。なほ『武藏曲』の序文に季吟が、「今はむかし逍遙遊のおきなといふものあり。云々」と言つて居るのを、芭蕉がその師からまでも翁と呼ばれた証とする説（奥の細道笈抄）もあるが、これは季吟の師たる逍遊軒貞徳をさしたので、芭蕉とは全く無関係である。それはともあれ三十七か三十九ですでに翁の称がふさはしかつた芭蕉である。更に許六の『俳諧問答』によれば、「其頃一天下桃青を翁と称して、いよく、名人の号を四海にしくと沙汰す」（自讃之論）とある。それは『曠野』が世に出る一、二年前の事だといふから、貞享三、四年の頃にはすでに芭蕉を翁と称することが、他門の間にまで汎く及んで居たのである。尤も許六の説だけでは、師に私してやゝ大袈裟に言つたとも思はれるが、去來の『旅寝論』の中にも、

又翁と書する事は其角先師を尊み初めて書す。しかれども聊か私にせず。むかし其角我に語りけるは、今度都に來り師の名の高きことをいよく知り侍りぬ。同門の人師を尊みて翁といふのみにあらず、他門の人我に向つて翁々と称す。まして季吟師の師也。其の子の湖春を先として翁といへり。

と見える。其角が初めて洛に上つたのは貞享元年の事であるから、當時すでに季吟の子の湖春に至るまで、芭蕉を呼ぶに翁を以てしたのである。貞享元年は芭蕉が四十一歳の時である。これは単に芭蕉の名聲が世に高かつたといふだけではなく、師長として仰がるべき人徳が備はつて居たからだと考へられねばならぬ。

桃青一流の実力を真に世に認めさせたのは、天和三年に出た『虚栗』である。周知の如くその跋文に芭蕉は俳諧の文芸性に対する新しい自覚を、強い信念と意氣とに燃えながら表明した。しかもそれは決して空疎な宣伝的なものでなく、この自覚を実践にうつす為にかばかり芭蕉が激しい努力をつづけたかは、その後の実績が証してあまりがある。『虚栗』そのものがすでに氣凱高致を称せられるに足りたのである。その上芭蕉の歩みは着々と向上の一路を辿つた。他門がすでにその徳に服するくらゐであつたのだから、天和・貞享の際門人たちが芭蕉を尊ぶことが如何に深かつたかは十分に想ひやられる。其角や嵐雪は当時極めて放縦な生活を送つて居た。破笠が往時を追懷して語つたといふ『老の楽』の逸話は、これまでも屢々引かれて居ることであるが、芭蕉が四十歳前後で早くも六十有余の老人の如く見え、其角・嵐雪等が氣づまりなので俳諧の外には師の前をはづしたといふのも、一面俳諧に於ける彼等の師への信頼を物語るものであつた。言はば江戸蕉門の——さうしてまた蕉風全体の開発の基は、この『虚栗』の一集によつて建立されたのである。同時に一流の師としての芭蕉の地位は、こゝに最も高く認められたと言つて宜い。それだけ『虚栗』の俳風が門人たちに及ぼした影響は大きい。特に其角・嵐雪の如き優秀なものであればある程、こゝに示された師の新風に大きな魅力を感じたにちがひない。其角が後年去来から流行の遅れたのを難ぜられたのも、固より其角自身の性格に基づく所が多かつたとはいへ、『虚栗』的な発想がいつまでも彼の心を捉へて、そこから抜けきらなかつたからだとも言へる。

芭蕉はかうしてまづ江戸に蕉門を確立した。而して次にその風を及ぼしたのは蓬左の地であつた。名古屋は寛文十二年東下の際にも、又延宝四年帰省の往復にも、立寄る機会があつたわけであるが、こゝが蕉門の一淵叢となつたのは、やはり『冬の日』の五歌仙の時に始まる。尤も夙くこの地の人清水春流

の撰する『藪香物』（寛文十一年刊）の中に、宗房の一句が採録されて居るので、芭蕉の名がそれまで全く知られて居なかつたのではなからう。しかし尾張の人士が芭蕉の名を注意したのは、延宝以後のことであるのは言ふまでもない。この地方は『尾張八百韻』以来有力な俳人が少くなかつた。その中若い新進の作家たちは、もう貞門・談林も見送つて蕉風の新しい動きに窃に心を寄せて居るものもあつたらう。特に『虚栗』の公刊は大きな刺激であつたにちがひない。折から芭蕉は伊賀に歸つた。さうして同じ季吟門のゆかりから、大垣の木因に案内されてまづ熱田の桐葉の許に芭蕉は迎へられたのである。つゞいて芭蕉の足は名古屋に入つた。それがどうした因縁によつたかは明らかでないが、思ふにやはり木因がその仲介をしたものであらう。『冬の日』第一巻の脇を野水がして居るのから見ると、その折芭蕉を宿したあるじが彼であつた事が知られる。——桑山煤渚の『金鱗九十九之塵』には『冬の日』が成つたのは、名古屋宮町の久屋町角から角へ入南側の家で、家請人は野水であつた事を伝へて居る（石田元季氏著『俳文学』考説三四九頁参照）。——一座の連衆は主客の外、荷兮・重五・杜国・正平・羽笠等であつた。この中野水・重五・杜国等はすべて名古屋の富商である。野水は備前屋佐次右衛門といふ呉服商、杜国は通称坪井庄兵衛といふ米商、重五は川方屋善右衛門といふ材木商であつた。ひとり荷兮は武家出身でしかも最も俳諧に熱心であつた。彼がまづ尾張蕉門の中心人物の如くなつたのは、自然の勢であつたらう。

『冬の日』は阿誰軒の『俳諧書籍目録』には「芭蕉作」となつて居る。芭蕉の撰としても固より不可ではない。けれどもすでに「尾張五歌仙」の称があるくらゐである。それがすべて芭蕉の指導で成つたとしても、撰者はやはり『花見車』（元禄十五年刊）に言ふ如く荷兮とすべきであらう。さうして『春の日』『曠野』の二集もまた彼の手で撰ばれたのである。『冬の日』からつゞいて俳諧七部集の一とされたもの

が二集までも尾張の地で成り、しかもそれがすべて荷今の撰であつたといふ事は、尾張蕉門の重大性と同時に荷今自身の重要な地位を思はせるものがある。事実『冬の日』は確に七部集の第一に置かれて、少しも不当と考へられる所はない。『虚栗』の跋文に芭蕉の高い志は明らかに示されたとは言へ、彼の自覚が作品の上に真に実践されたのは『野ざらし紀行』の旅に於てであつた。さうして深川の草庵に帰らない以前に、はからずも名古屋連衆を門人として五歌仙の興行を見たのである。芭蕉の新しい自覚に基づく工夫は、まづこゝに連句の作品として最初に具現された。全篇芭蕉の細かな指導が行き互つたであらう事は容易に想像される。それにしても名古屋の俳人たちの間に、芭蕉の鉗鎚をうけるに堪へるだけの素地がなかつたとしたら、七部集の第一集はやはり江戸帰庵の後をまたなければ成らなかつたであらう。のみならず『冬の日』が機縁になつて、第二・第三の集までも尾張の地で撰ばれ、荷今をして名を成さしめるに至つたのである。芭蕉を迎へるまで、また迎へた後も、名古屋俳人の中心的地位に荷今があつたとすれば、尾張蕉門の消長はまさに彼の動静と伴なつて居なければならぬ。實際彼が『春の日』『曠野』と熱心な歩みをつゞけて居る間、尾張は優に江戸と対立すべき蕉門の一中心地であつたと言つて宜い。

『冬の日』『春の日』が成つた頃は、全く尾張蕉門は芭蕉一流の最前線に立つ概があつた。その間江戸では仙化の『蛙合』がわづかに芭蕉庵の衆議判を世に示したくらゐである。しかし尾張が蕉門に覇を唱へたのは、実は極めて短い間に過ぎなかつた。連衆の主たるものが名古屋の富商階級であつたことを思ふだけでも、そこに芸道に対する強い精進を期待するのは無理であつた。のみならず彼等の中心人物ともいふべき荷今は、必ずしも芭蕉俳風の忠実な信奉者ではなかつた。『曠野』編纂の時まではなほ師の

信賴に応へるだけの誠意を示したが、その後次第に句作の低調化を見るに至つた。思ふにともかくも荷今は尾張作者中に於ける専門家である。それだけに当初芭蕉の新風に移らうとする熱意も強く、又相当の才もあつた。しかし芭蕉の如く絶えず道を求めて止まぬ厳しい自己反省には堪へられなかつたのである。いつの間にか再びもとの安易な道を歩かうとするに至つた。元禄六年の『曠野後集』、翌七年の『昼寝の種』を見ると、それが同じ荷今の撰になるものとは到底思はれない程の低調さを見るのである。最近知られた正月二十九日附去来宛芭蕉の手紙に、

荷今集之事日々に御申越、其仕かた賤敷凡情を顧し候事、御とかめ尤に被存候。され共平人の情常之事に候へば、少も御とんちやく被成間敷候。万世に俳風の一道を建立之時に、何ぞ小節胸中に可置哉。彼等に似合敷心指<sup>こさ</sup>にて候。立廻るうちに古く成候て、既三ツ物五年七年此方一動の働も見えず候。

(下略)

とある。これは最後に記した「腫物に柳のさはるしなへ哉」の句、その他の内容から元禄七年の書通と推定される。而してこゝに荷今集と言つたのは、恐らく前年十一月に成つた『曠野後集』をさすのであらう。その序文には荷今自ら貞門時代の風を述べて、「たゞいにしへをこそこひしたはるれ」と言つて居るのである。これは勿論芭蕉に対する反抗の意ではなく、集中にも師の句は収めてあるのであるが、その内容から見ても当時の蕉風に忠実に従はうとするものではなかつた。これに去来の如きが憤懣を感じたのは当然であらう。手紙はそれを師に訴へたのに対する返事である。こゝに芭蕉は「万世に俳風の云々」と言つて大いに気概を示し、荷今一派を全く無視する態度をとつて居る。荷今が芭蕉晩年に勘当された門人だと伝へられるのは、かうした経緯が存したからである。

荷兮について尾張蕉門に嶄然頭角をあらはしたのは越人であつた。彼は『冬の日』にはなほ出座せず、『春の日』に至つて初めて入集したのであるが、その時すでに荷兮・野水・羽笠等と相伍して遜色なく、『曠野』では深川の一夜師との両吟に手柄を現して居る。又其角・嵐雪の両高足とも両吟して、蕉門に於ける地位はむしろ荷兮以上に見られて来たのである。これより先越人は貞享四年冬師翁を案内して三河国保美に杜国を訪ひ、又芭蕉が『笈の小文』の旅から帰庵する折は、木曾路を経て江戸まで随従して来たのである。少くとも芭蕉との親しみが荷兮以上に加はつて居たことは、かうした事実からも十分認められる。やがて『ひさご』に序文をものして、蕉門の高弟として確乎たる地位を示すに至つたのは、当然の径路といふべきであつた。しかるに元禄三、四年の交を頂点として、彼の作家的熱意は漸く減退の兆を呈し、『猿蓑』に入集するものも僅かに六句にすぎない。その後『曠野後集』の如きには荷兮・且藁・傘下等と伍して、やゝ活動を続けて居るとはいふものの、その作品は頗る精彩を欠いて居る。かうして彼もまた尾張蕉門としての重きをなした期間は極めて短い。許六が『歴代滑稽伝』に「路通・荷兮・野水・越人・木因等は勘当の門人なり」と記したのは、必ずしも正確な事実とすべきではない。現に芭蕉は元禄七年最後の旅の折に、荷兮を訪ねて亭主を始め越人・長江・傘下・釣雪等と共に一卷の俳諧を催して居るのである。けれども芭蕉の晩年に名古屋の蕉門が、師から漸く離れて来たことも、また事実上否定することは出来ない。それは一種の特別な情愛でもあつたらうが、とにかく芭蕉から最も親しまれた杜国は早くその地を去り、ついで流謫の地に歿した。五歌仙の興行に芭蕉を自亭に迎へた野水も、いつか荷兮・越人の風に化せられて終を全うする事が出来なかつた。芭蕉にとつて蓬左の地が、次第に落寞を感じしめたことは十分想ひやられる。



『削かけの返事』によれば、元禄四年帰東の折、芭蕉は名古屋に足を止めなかつた。「其時は例の無機嫌にて名古屋は沙汰なしに通じ、熱田にて三宿逗留也。野水・越人は遠慮あればと荷兮一人見舞はれ、立歸りにいたされ候」とある。これはこの年九月野水と越人とが上京して、凡兆を語らひ路通のことをあしざまに言つたのが、芭蕉の機嫌を大いに損じたことをさすらしい。同書は『不猫蛇』に対する反駁書であるから、もとより記す通りをそのまゝ信ずることは出来ないが、荷兮・越人・野水等が芭蕉の不信を買うて居たことは、支考のみならず他の門人たちにも知られて居たのである。許六も「答許子問難弁」の中に「かの荷兮や先師世にます内ひたすら信仰す。一とせ故あつて野水・凡兆と共に先師に遠ざかる」と言つて居る。尤もこれまた支考から聞く所によつたのかも知れないが、『宇陀法師』に「名古屋の荷兮・越人、曠野に眼明きたるに似たれど、ひさごに底を入れられ」と評したのは公正の言であり、又「先師の手伝にて撰者の号を蒙りたる人、天晴作者と見えて其人何となくゆかしきに、師遷化の後に後集を出して下手の尾を出し、初心の人に嘲けらるる」と言つたのは、一般に師の流行に伴はない作者を難じたものではあるが、荷兮・越人に対する批難の意をも含むものであつた。かうして尾張の蕉門は結局一時の榮に終つたのである。固よりなほ熱田に桐葉・叩端・東藤等があり、鳴海に知足・業言・安信等がある。就中鳴海の知足は『千鳥掛』の中心人物として重きをなすものであつた。芭蕉に仕へるものと篤く、また芭蕉から信頼される事も深かつた。しかし所詮彼等は風雅に於ける第一等を志す人々ではない。芭蕉は『野ざらし紀行』の旅以来、幾度かこの地に杖をとゞめたけれども、尾張には真に蕉風の血脈を伝ふべき門人を得なかつたと言はねばならぬ。とはいへ『冬の日』から『春の日』と相ついで光をかゝげた一事は、後ちこの地に『秋の日』の新運動を生む機縁を作つたのである。芭蕉の遺芳は決し